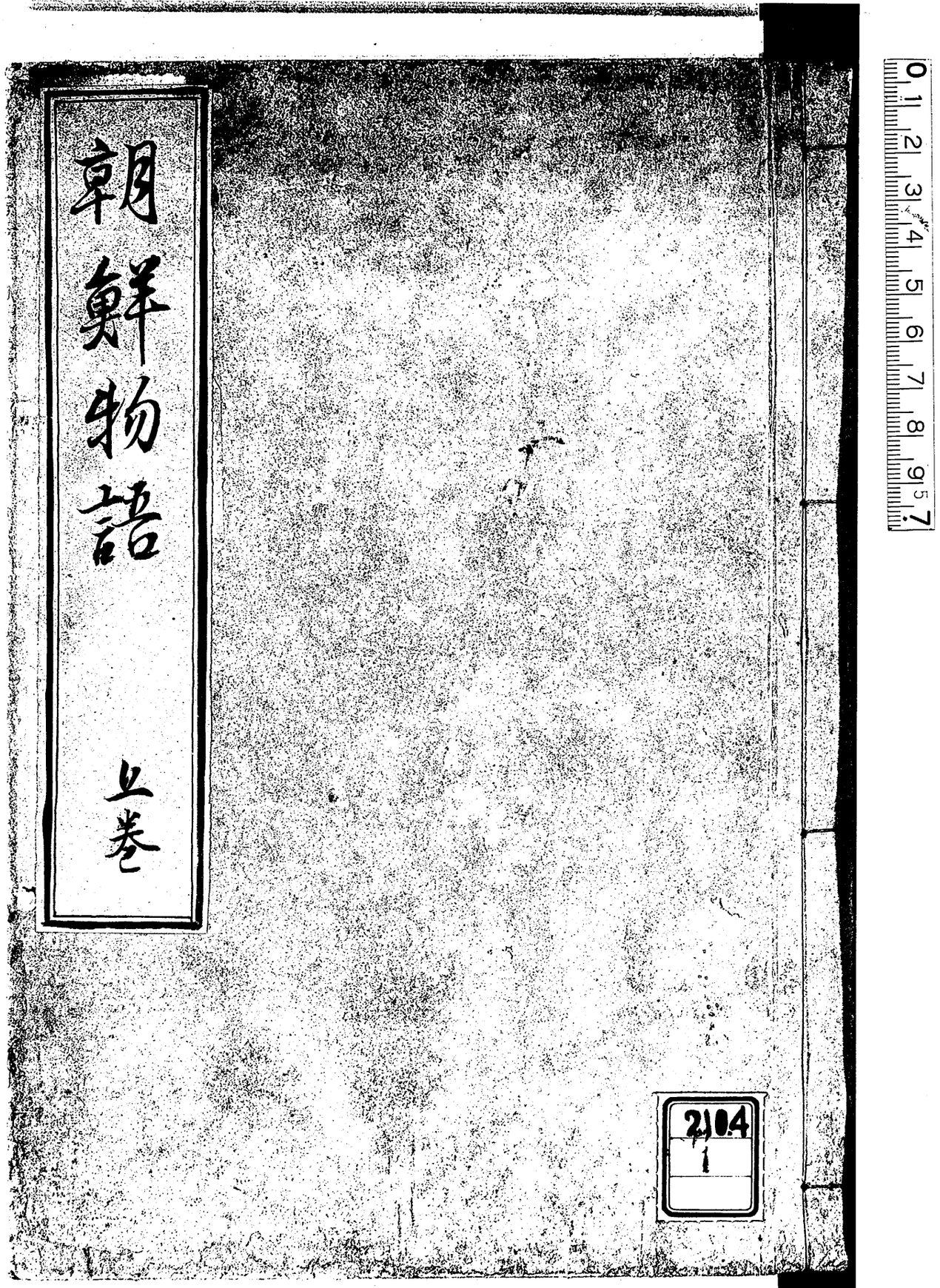

タイトル番号：0022

書名：朝鮮物語

3冊

大河內秀元陳中日記

朝鮮物語 全部 二冊

東都書林 誠格堂梓

朝鮮物語序

余嘗論豐公之伐韓。與秦政之築長城一也。皆以禍其子孫。而其功又有施於後世者矣。蓋秦政靡爛其民。以築長城。遂致天下怨叛。子孫敗亡。然而後

菅氏所藏

立漢胡虜。制其奪軼者。莫不賴長城爲之隔閡焉。豐公興無故之師。以斬伐異域。使我士暴骸骨於外。我民困賦役於內。以逐至海內怵然憤。雖天命自有所歸乎。其子孫亡滅弗救者。伐韓之役。實爲之禍也。然而至今三百有餘年。西洋諸戎雖或垂涎於我。不敢輕肆。其饒啞者。豈非當日威武烽於四海者。有足懾伏其桀驁之心乎。書賈牧野之善。將刻大

河内秀元朝鮮物語。來乞余一言。斯書記豐公伐韓。和議既敗。再擧大軍。白石源氏。未以倦藩翰譜。則其爲實錄。不可掩。夫伐韓之役。武家著者。莫若碧海大捷。與蔚山死守。斯篇所載。於蔚山事。爲特詳矣。蓋秀元。在圍城中。親歷辛艱。當日情狀。皆獲之於目擊之間。故摸寫得其實。使讀之者。至今凜凜有生氣。夫豐公伐韓。雖不爲無功。於義則未爲得焉。獨至其

將士之忠勇義烈。百折不屈。以全其所守。則凡在人臣。孰書爲師法者。讀斯書者。其領此意可也。

嘉永己酉夏閏四月弘菴陳人

大雅識

朝鮮物語 イニ記

大河内茂左衛門尉源朝臣秀元記

抑　大相國從一位前關白太政大臣豐臣秀吉公者總海無雙之名將也報先君之仇讎夷四海之逆臣舉有德賞有功又欲通異域富邦境而遣使於朝鮮而後殿下發兵征伐之軍少有利故慶長丁酉發關西之兵又大征之予太田飛驃守之在幕下得逐馬塵故記所親見之事以貽子孫者也

朝鮮物語卷之上

大河内茂左衛門尉源朝臣秀元記

慶長二年丁酉三月十八日公子筑前中納言秀詮公を以て朝鮮征伐の大將軍として高麗國釜山海の城主に任じ太田飛騨守熊谷内藏允早川主馬首筧和泉守福原右馬助毛利民部大輔竹中伊豆守を以て諸軍の奉行として相從軍勢備前の浮田中納言安藝毛利中納言毛利宰相峰須賀阿波守加藤左馬介生駒雅樂頭同嫡子讃岐守藤堂佐渡守長曽我部土佐守脇坂中務少輔歸島出雲守池田伊豫守小川左馬助菅三郎兵衛尉同弟右衛門八郎

島津兵庫頭加藤主計頭小西摂津守青澤志摩守中川修理大夫
立花左近將監鍋島信濃守小西甲斐守松浦肥前守柳川對馬守
羽柴兵庫頭伊藤民部大浦毛利壹岐守同嬬子丞島津又七
郎秋月三郎高橋九郎相良左兵衛佐是等五人は其後志摩國主九鬼
大隅守甲斐國主淺野左京大夫大小名四十二人其勢都合一十六萬
三千餘騎

大相國秀吉公秀詮公次ぎ諸大將を召て上意の若年なるとも
十六歳の秀詮名代の上將軍たり法事秀詮の下知に從ひ
諸軍勢上下の働甲乙明らかに善悪誤ることなく有様に言上
すべし其為なりの奉行靈社上巻の起證文差上べきの旨

仰あり則殿中において七人の口奉行起證文を認め吏檢使德善
院民部卿法印大聖僧理大夫をもて上け奉りける

高麗國の軍中の壁書の次第

一今度軍中諸勢上下の働明らかせんさくを極め善悪を偽
らず秀詮裏判をもて七人の奉行言上可仕事
一十六万餘渡海の軍勢上下人馬夫九万余るまで一倍の扶
持方の事但馬一疋一日の飼料大豆六升米四升宜
敷事
一奉行七人手柄代官所の米入次第家中の人数右のとく遺事
一秀詮前に於て為可各相談致して考分の口上に付て若悪

の落ち極むよし事

一七人の手柄を賞じたる成つくもの有こふ拵てハ言上り

及ばず秀全急度てら申付事

一御武略を舟へ見合もあるべ城度の働仕る義事

一秀吉の鞭を以てこる藩國の八ヶ道を先として大明國の四百餘州南蠻吉利支丹國其外遠国ふるまで武命を限り

ふ切取る異國軍兵の頸塚を日本にうけ伝事且々和漢後記の為なり然ハ則戦場の高名ハ言ふ及ばず老ふ男女僧俗ふ限らず賤山うつふるまで著く難切て首数を自車に渡るべきものせ

右の像を拵相宵を経重ふ依て急度てを伝付ものせ

大の御壁書の御朱印十ヶ条の出をふ巻ふ

五月廿日　辛亥辰の刻筑前の太守黄門秀全公御出陣御門出の御目見こして御登城四十餘人の大小名ハ供仕ふ秀吉公御機嫌能品くを伝付御小袖三百御帷子五百御単物三百金銀長光の御太刀波わ長き備前の兼光の御腰物御馬五ツ秀全卿御洋頃付大ふ悉く御小袖ハ帷子皆彩く金銀を沫ばば秀全公御座船御堺下ふ後橋ふり御先陣ふ進ませふ各大小名も豊後橋京橋ふり和ふ乗思くの馬験舟の表ふ押立母衣旗指物弓鎗鉄炮を以て舟に飾り家くの役ある幕成ふ走ふかー一

手ゝに押乃流出和の別儲人の妻子今を限の別と思ひなる
ふや貴も賤も舟の法ふ送り出く男の身に取添て鎧の袖
草摺ふ立て同ど道ふ流仲ぶ次第ゝの出和成バ枯く教訓
し和中より立下し舟を急で押出し暫く舟を人送りて命を
限りも露の身を永ふ別の悲思ひきみえる共そ同さるれ
と云も河へぞ宇治川ふ流入く沈むもあり伝へ聞古の松浦佐
夜姫と申ん唐國和の名残を慕ひ泣方波ふ袖を濡し次第
ゑ沈みしとやらんも是ふ為て増るべき上古も
今も未代も換し世き門出送り見ふり涙ふ袖ふ掛けるも
頃ハ五月五の空吹風ふさそはれて秀吉公御船ハ摂州大坂ふ急

世給ハ備和淀山城ふゆゝしく後陣ハいとぐ伏見を出やらんに三
百六十余丁川水の上錦を晒をなく引く旌旗日を蓋ひ引り廿二
日大将軍公を初奉り諸大名大坂をお和し兵庫の湊ふ纜を解
其道十里余　廿三日兵庫を乗出し播州室の津ふ急岸に其法上十八里　廿四日
備後の鞆の湊ふ陣に其道十里　廿五日周防上の関に着此法路二十里　廿六日秀
吉公長門の下の関ふ急陣其法三十五里　廿七日豊前國の筑前ふ入博
有て朝鮮ゑ渡海の御用意あり法大将ハ国元城地へ上ける
十人の日数ハ廿六日ふイウウト二十里を乗渡し芝浦嵯峨の関
ふ急居に廿七日の未明ふ太田飛騨ゑ一吉嵯峨の関を京あて回
杵の居城ふ着和も其道七里　廿八九日より酒味噌酒肴大豆扶持方

数百艘ふ積浮べ先立て肥國へぞ出げふ兆孫ちゞ祇園丸權現
丸と云十六ゝん計艘の女舟ふ石火矢大筒中筒弓鎗玉薬其外万
端燭次下にゐるまで悉く積せ切籠の燈籠突鐘をたらせ乍家
中軍士面〻の乗船ふ中間五系船幕船下数〻の砲替櫓梶
増梶ふ下幾らゞ舟元へける六月廿五日七頭の御奉行在所きを
乗出し嵯峨の関ふ集て豊後の内竹田津の湊ふのゝふ嵯峨の関
より此海上十六里廿六日竹田津を出て長門下の関ふ着岸に此道十里暫く後ふ
汐ゞ迄して名日の引汐ふ法を関の戸ふ乗取爲ふと兆孫ちゞ
大船計艘の切籠ふ火をそて軍勢ふ先立て日本第一の迫門に
悪るく業元而ふ迫門により海上に化地出来てける兆騨せゞ

本船ふ少も遠ざる大船二艘出て陸肥國ふ差寄て押行ける續く兵
船足を本船と合潮て妻子ふ乗行船も同足本船ふ法きて弓手
ふ寄来るもあり左右兆騨ちを見て下知をゝし本船を乗ゆ
らく切籠の火をけし頻ふ早鐘をせめ急く堅約の貝をたて関
せゝれば彼化地と連行兵船の外仰天し水主梶元塔梶梶元
迫し本船ふ押法きふけり夜中兆ち地の島ふぞ着〻りける
下の関より此道十里豊廿七日肥前名護屋ふ出岸に此舟路三廿八日名
護屋ふ滞留して大小名悉着到を付れるふ諸〻悉軍
勢集りぬ廿九日秀詮公御召船日本丸を見奉まゝば遥ふ沖ふ浮
べさせられけるゞ去度國御渡海と御下知の鐘を突鳴し各兵